

ビニールハウスで「平飼い」

環境、餌にこだわり養鶏

西伊豆・地域おこし協力隊 酒井さん

西伊豆町地域おこし協力隊の酒井宏治さん(53)が取り組むビニールハウスを活用した養鶏場で、鶏が順調に卵を産み始めている。環境や餌にこだわって育てた鶏の卵は、「白身に甘さがある」「おいしい」と早くも評判だ。宅配サービスを実施し、近く観光養鶏も始動させる計画で、迫る協力隊の任期満了を見据えて着々と準備を進めている。

酒井さんは、加工の幅が広い卵に可能性を感じ、30代から養鶏について独学で取り組んできた。養鶏ができる自治体を探していたところ、同町と縁があつて2020年に協力隊に就任した。

かつてカーネーションが栽培されていたが長年放置されていた宇久須の山奥のビニールハウスを1年かけて整備し、昨年の夏と秋にひよこ

約200匹を迎え入れた。12月中旬ごろから産卵を始め、今では1日に80個ほどを産むという。より自然の環境に近い「平飼い」で育てる。好きな時に餌を食べたり、自由に動き回れたりする。狭いケージの中よりもストレスが少ないため、良質な卵を産むようになる。値段は1個100円前後と一般的な卵に比べて高価だが、その分品質で勝負し、健康志向の人を主なターゲットにする。

餌はオリジナルで配合するこだわりあり。米ぬかやおからを混ぜて発酵させたものに、昆布やかつお節の粉などを配合して作る。ふんは畑の肥料として活用し、循環するよう試みる。

順調に産卵、宅配サービスも



産みたての卵を手にする酒井さん＝西伊豆町宇久須

数十個とまとまった数量のみの受注で、1月末ごろから始めた。町の中心部から離れた場所に住む高齢者などから2件の定期購入の申し込みがあり、養鶏場所が決まり、そこから急ピッチで整備を進め、何とか任期中に間に合わせた。

「物価の優等生」とも言われてきた卵だが、飼料価格の高騰などで値上がりしている。餌を自家配合する酒井さんに影響はほとんどないが、物価高は養鶏場運営に影を落とす。車で15分ほど離れた自宅と養鶏場を1日2回ほど往復するため、ガソリン代がかさむという。

今後は、産みたての卵拾いや鶏との触れ合いなどを体験できる観光養鶏の実施、将来的には町内にオムライス専門店の開業を夢見る。

酒井さんは「3年間大変だったが、ここまで頑張れたのは地域の人の出会いや町のバックアップのおかげ。卵を広く認知してもらい、たくさんの人に食べてもらいたい」と力を込めた。

(松崎支局)

森永啓太記者